◆第55回近畿地区国立大学体育大会◆

日時：平成29年8月10日(木)　於：服部緑地陸上競技場

【男子】

	1位 大阪大	2位 京教大	3位 大教大	4位 神戸大	5位 京都大
総合	160	126.5	117	110	87.5
(トラック)	(85)	(65)	(55)	(68)	(57)
(フィールド)	(77)	(61.5)	(62)	(42)	(30.5)

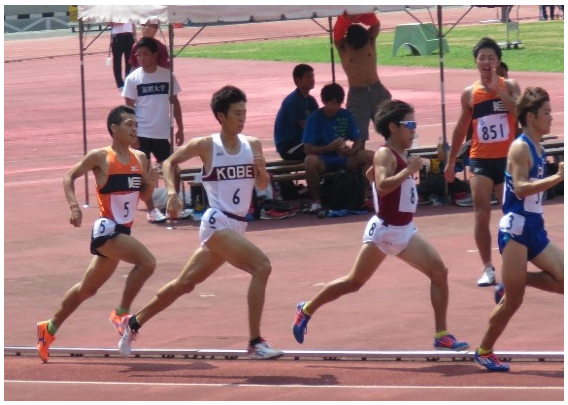
【女子】

	1位 京教大	2位 神戸大	3位 大教大	4位 京都大	5位 大阪大
総合	159	75.5	68.5	53	51
(トラック)	(102)	(44.5)	(56.5)	(14)	(28)
(フィールド)	(57)	(31)	(12)	(39)	(23)

【男子】

種目	順位	氏名(学年)	記録(風)	備考
100m	3	喜多政天(1)	予 10″97(−1.3) 決 11″00(−0.4)	
	6	近藤佑哉(3)	予 10″98(−1.1) 決 11″08(−0.4)	
		小西玄起(2)	予 11″15(+0.5)	
200m	6	水野翔太(3)	予 22″24(+1.4) 決 22″38(−0.6)	
		奥田真伍(3)	予 22″91(+0.0)	自己新
		竹島周平(3)	予 23″18(−0.8)	
400m		高柳正徳(2)	予 51″10	
		伊藤智也(2)	予 51″36	
		前田光雄(2)	予 53″80	
800m	1	植田悠貴(M1)	予 1'52″95 決 1'55″86	大会新
	6	南部　慎(2)	予 1'56″56 決 2'02″30	
1500m	2	桂　翔太(3)	予 4'18″57 決 4'07″15	
		山下駿平(3)	予 4'16″37 決 4'21″89	
		湯浅　賢(1)	予 4'20″86	
5000m	5	平井大誠(2)	16'21″20	
	6	丸岡克成(M1)	16'44″04	
		矢田絢介(1)	17'03″39	
110mH	4	藤原雅志(4)	予 15″28(−2.8) 決 15″14(−0.5)	
	7	山口大地(2)	予 15″44(−1.7) 決 15″73(−0.5)	
	8	宮崎晃一(4)	予 15″94(−1.5) 決 20″60(−0.5)	
400mH	4	清水和輝(4)	予 55″51 決 55″00	
	7	藤原雅志(4)	予 54″68 決 57″19	
		谷本睦弥(4)	予 57″73	
3000mSC	3	坂元亮介(4)	9'33″03	
		佐藤　匠(2)	10'40″40	
		池内真弥(3)	10'49″93	
スウェーデンR	4	喜多(1)水野(3) 近藤(3)高柳(2)	1'56″58	
走高跳	5	佐野　孝(M2)	1m90	
		小西　満(2)	1m75	
		矢田楓馬(1)	NM	
棒高跳	4	吉田峻一(M2)	4m20	
	6	早川雄己(4)	3m80	
	8	宮崎晃一(4)	3m80	
走幅跳		木原日向(3)	6m07(−0.8)	
		西村拓海(3)	5m99(−0.8)	
三段跳	4	永田　遼(M1)	14m06(+0.5)	
	6	神田　実(2)	13m68(+0.0)	
砲丸投	3	上野環太(4)	11m29	
	5	太田康介(3)	11m11	
		渡邉　開(1)	7m74	自己新
円盤投	2	上野環太(4)	38m76	
	5	太田康介(3)	33m08	
	8	高畑大地(1)	30m36	
やり投		太田康介(3)	49m97	
		渡邉　開(1)	46m46	

800m決勝　植田(M1)



1500m決勝　桂

3000mSC　坂元(4)

スウェーデンリレー　近藤(3)

【女子】

種目	順位	氏名(学年)	記録	備考
100m	8	森下奈菜(4)	予 13″01(−0.3) 決 13″15(+0.6)	
		武村明香(2)	予 13″08(−0.7)	
200m	4	森下奈菜(4)	予 26″24(−1.2) 決 26″59(−0.7)	自己新
		宮崎奏菜(1)	予 29″72(−1.9)	
400m		宮崎奏菜(1)	予 1'07″59	大学ベスト
800m	7	宮崎安奈(2)	2'32″15	
1500m	2	仲野由佳梨(1)	4'50″55	大学ベスト
	6	甲斐麻華(2)	5'07″09	
	7	佐々木真子(3)	5'13″40	
3000m	2	仲野由佳梨(1)	10'35″12	
	5	甲斐麻華(2)	11'19″83	
	6	佐々木真子(3)	11'26″16	
100mH	4	森下奈菜(4)	予 14″60(−1.3) 決 14″56(+2.6)	
	7	武村明香(2)	予 15″95(−0.7) 決 16″33(+2.6)	大学ベスト
4×100mR	5	武村(2)森下(4) 岩倉(1)日髙(2)	51″64	
走高跳	2	日髙水樹(2)	1m66	
走幅跳	3	武村明香(2)	5m49(+0.2)	
	6	岩倉美晴(1)	5m04(+1.2)	大学ベスト
		日髙水樹(2)	4m67(−0.5)	
砲丸投	1	麓　沙恵(4)	12m24	
円盤投	2	麓　沙恵(4)	34m27	
やり投		麓　沙恵(4)	26m83	

110mH予選　森下(4)

3000m 仲野(1)

砲丸投　麓(4)

主将:近藤佑哉

近国は勝負強さを身につけようと戦いました。男子としては、全体で自己ベストの更新が2名だけという寂しい結果ではありましたが、得点分析から8点上乗せでき110点獲得できました。分析上圏外からの入賞もあり、勝負強さという点に関しては少し成長があったのかと思われます。ですが、実力はまだまだ足りないので、この夏で記録を伸ばせるようにさらに努力していきます。応援ありがとうございました。

女子主将:末廣真子

今年の近国は、得点分析で上位に入っていた選手が出場できない等のトラブルがいくつかありましたが、10の種目で上乗せをし結果、総合では15点以上の上乗せをすることができました。しかし、1位の京都教育大学には80点ほどの差をつけられまだまだ私たちの力が足りないことを痛感させられました。8月の女子の対校戦はまだ西日本六大学が残っているのでここで気を抜かず最後まで全員で一丸となって戦っていきます。暑い中の大会となりましたがたくさんの応援本当にありがとうございました。

ご来援いただきましたOB・OGの皆様、ご声援ありがとうございました！！(敬称略)

新17椎木茂久　新18平田明男　新21絹田清昭　新32鎌田早苗　新55平澤恵利　新65村田一立

近国体 2017 観戦記【女子を中心として】

新３２回　鎌田早苗

左から筆者、宮嵜仁美（4）、藤原千鶴（4）

７月の三商大戦から１か月。今回は女子がみんなで取り組む対校戦ということで、今年もおじゃました。今年の会場は過去３年とは異なり、服部緑地陸上競技場。ここは学生として最後に走ったトラックレース（関西実業団・学生対抗）の 800m で、生涯ベストとなる 2’15”9 の学内記録（当時）を作った思い出深い競技場だ。

最初の決勝種目は 1500m で、３人がエントリーした。先頭集団に入り、積極的なレースをした仲野が 4’50”55 の２位、自分のペースを守り抜いた甲斐が 5’07”09 の６位、終盤の粘りを見せた佐々木が 5’13”40 の７位と３人が得点した。この３人は午後の 3000m でも健闘し、仲野が 10’35”12 の２位、甲斐が 11’19”83 の５位、佐々木が 11’26”16 の６位だった。秋の関西学生駅伝でもこの３人が軸になってチーム作りをすると思う。切磋琢磨して、ただし、故障をしないように注意してこれからの練習に取り組み、成長してほしい。

走高跳には日高が出場した。昨年は先輩２人と一緒の出場だったが、今年は１人の出場で、彼女を見守るように後ろのスタンドには応援の部員が控えていた。155cm は１回で跳んだものの、その後 160cm、163cm、166cm は３回めでクリア。166cm をクリアしたのが２人だったが、試技数の関係で２位。ベスト記録から考えると今回の結果はややもの足りないが、表彰台を守ったのは本人の底力だと言えるだろう。走幅跳には３人がエントリーして、武村が 5m49 で３位、岩倉が 5m04 で６位に入賞した。走高跳からあまり時間をおかず出場となった日高は、疲れもあったか本来の跳躍ができなかったように思う。しかし、この下級生３人のがんばりは今後の神大女子の中心になるだろう。楽しみだ。

毎年投てき３種目に出場してきたポイントゲッターの麓は、今年も活躍した。砲丸投は 12m24 で４連覇、円盤投は 34m27 で２位となり、１５点を獲得した。フィールド得点３１点の半分を一人で獲得したことになる。彼女が卒業した後のフィールド種目は跳躍陣が軸になると思うが、投てきの対策を考えなければ京教大との差はもっと開いていくだろう。ここは、やり投げがご専門の前田先生に選手を発掘していただくことも考えられないだろうか。かつて兵庫県にはやり投げの選手を育てるのに定評のある指導者がいた。新入生全員にやりを投げさせ、当時珍しいビデオカメラでフォームを撮影し、適性を見ていたそうだ。話がそれてしまったが、女子だけでなく男子も工夫の余地があることだろう。

短距離種目は、宮嵜仁美欠場というアクシデントがあり、不安も予想されたが、森下が大活躍。100m、200m、100mH と全て予選を通過し、リレーを含めて目標の一日７本走破を達成した。100m は 13”15 の８位、200m は予選で 26”24 の自己新、決勝は 26”59 の４位、100mH は 14”56 の４位と、表彰台には立てなかったが、一人で９点を獲得した。幹部を下りても走る姿で後輩を引っ張る様子は４年間の成長が見えて、頼もしかった。武村も専門外ながら 100m と 100mH で森下についていき、100mH では決勝に残り、16”33 で７位に入った。今回 200m と 400m に挑戦した１回生の宮﨑奏菜は 400m で大学ベストを出したが、競技としては厳しい結果になったかもしれない。生活環境の変化、大学と部活動の両立など大変なことはあるだろうが、これまで多くの先輩たちも乗り越えてきた。ぜひ力をつけて活躍してほしい。

出場者数の関係で決勝１本になった 800m には宮崎安奈が出場した。明瀬の当日欠場は思いがけず、競技時間の変更もあったがよくがんばり、2’32”15 で去年を上回る７位に入賞した。

４×100mR は武村 - 森下 - 岩倉 - 日高のオーダーで、51”64 の５位だった。短距離専門ではないが、３人が来年以降も残る。個人の走力を上げてさらに上を目指してほしい。

対校得点は、トラックが 44.5 点で３位、フィールドが 31 点で３位、総合が 75.5 点で一応２位を守ることができた。しかし、総合３位の大教大とは７点差で、どこか１種目でも取りこぼしがあれば逆転されていたことも充分考えられる。今回、本来出場すべきなのにいろいろな事情で出場できなかった選手が何名かいた。チームとしても痛手だったと思うし、何より本人が残念に思っていることだろう。どんなに気をつけていてもアクシデントは起きてしまうものだ。だから、結果については語ろうとは思わない。大切なのはそれ以前に、アクシデント

が起きにくくなるように日頃の生活を送ることだと思う。また、ここ数年神大女子はこの大会の総合優勝を目標として、ほぼすべての種目に３人ずつのエントリーをしてきた。今回、最初からエントリーが１人、２人という種目があったことは少し残念に思った。何でも出ればよいというものでもないが、総合で上を目指すのであれば多少専門外の種目に挑戦することも必要になるかもしれない。2014 年の第 52 回大会に初優勝した時には、その時の幹部の考えによると思うが、とにかく１点でも多く獲得するために、三段跳の選手が走高跳に出場したり、400m の選手がやり投に出場したりしていた。そういう意味で、武村の 100mH はチームのためになるチャレンジだったと思う。また、神大女子は関西インカレでの総合入賞を目指しているが、そのためには参加標準記録を突破することが必要になる。昔と異なりそこは厳しくなっているが、ぜひ多くの選手に突破、出場してほしいと願っている。

昨年失礼ながら厳しいことを申し上げた男子だったが、今年は健闘していたと思う。トラック競技の多くは４組１着＋４という厳しい条件だったが、＋αで神大の選手が決勝に進出するアナウンスを多く聞くことができた。着順で予選通過ができなくてもあきらめずに最後まで走り抜いた結果だと言える。

100m では１回生の喜多が混戦の決勝で 11”00 の３位に入った。その勝負強さで短距離を引っ張る存在になってほしい。800mでは植田が予選で 1’52”95 の大会新記録を出し、決勝でも 1’55”86 で圧勝した。南部は 2’02”30 で６位に入ったが、予選の走りができていれば上位入賞も可能だった。110mH は最後の３組が計時のトラブルだろうか、再レースとなったが、２度目の予選でも山口がしっかり力を発揮して、３名全員が決勝に残った。予定よりも遅い時間になった決勝では藤原が 15”14 の４位、山口が 15”73 の７位、宮崎晃一は途中でハードルを引っかけてしまったが最後まで走り抜き 20”60 の８位だった。しかし、ここで途中棄権をして０点にするのでなく最後まで走って１点を獲得したことはチームとして評価したい。3000mSC でも健闘し、坂元が 9’33”03 で３位に入った。最後は２人に追い越されたが、終盤のきついところでレースを引っ張る積極性はすばらしい。スウェーデンリレーは喜多 - 水野 - 近藤 - 高柳のオーダーでタイムレース決勝に臨み、1’56”58 の４位、歴代６位の好記録だった。１年に１度この大会でのみの種目のため、過去の記録もけっこう残っているが、その中でも私が在学していたころの手動計時の記録（1981 年の 1’57”9）がまだ歴代１３位に残っていることは驚きだった。トラック競技は６８点を獲得し２位になり、去年の５位から躍進した。ただし、これには植田が 800m 予選で出した大会新記録のボーナスポイントが含まれている。これがなければ京教大が上回っているところだった。また、こういう時に、今回の 110mH のようなところできちんと得点を取ったことが大切になる。

フィールド種目でも、種目により差はあるが、全体としてがんばることができたと思う。棒高跳は長い競技時間も集中を切らさず、吉田が 4m20 の自己ベストタイ記録で４位、早川も 3m80 の自己ベストタイ記録で６位タイ、宮崎晃一は同じ 3m80 ながら失敗試技数の関係で８位タイと３人が入賞した。練習環境に恵まれないのは神大陸上部の昔からの難点であるが、その中でも特に難しい種目で結果を出すのは相当な工夫や努力の結果だと思う。ぜひよい伝統として後輩に引き継いでほしい。投てき種目では今年も上野、太田が力を発揮していた。砲丸投では上野が 11m29 の３位、太田が 11m11 の５位だった。円盤投は上野が 38m76 の２位、太田が 33m08 の５位に加えて１回生の高畑が 30m36 で８位に入った。上野、太田の２人で２１点とフィールド得点の半分を獲得している。これを受け継ぐ下級生は育っているだろうか。フィールド得点は 42 点で４位だった。また、総合は１１０点で４位だった。昨年より点数、順位共に上回っている。男子は部員が多いため、対校戦は上級生が出場することが多くなると思うが、部として競技力の維持、発展のために、下級生はどんどん先輩についていき、上回るくらいのパフォーマンスを日ごろから心掛けてほしい。

今年の夏はロンドンの世界陸上で盛り上がっている。特に選手と同世代のサニブラウン・アブデル・ハキーム選手、関西学院大の多田修平選手の活躍は、陸上競技に関わる人でなくても広く知られるようになった。彼らは春先にフォームに関わる指導を受けて、ちょっとした改善をした結果、タイムが飛躍的に伸びて、世界のスプリンターになったのだそうだ。今はランニングフォームも簡単に撮影して見ることができる。先日の大会でも競技中にフォームチェックをしている選手を見かけた。記録の向上に近道はない。理にかなったトレーニングを地道に繰り返すことが何よりも大切だ。トレーニングに関して情報を得たり、アドバイスをし合ったりすることが今の神大陸上部にはあるだろうか。そこが、前田先生が言われる「このままではよくない」を解決する一歩になるのではないかと、外野から思っている。

会場のどこを歩いても部員が男女関係なく応援しているし、どこを歩いても挨拶をしてくれる。その気持ち良い行動は、陸上競技を離れてもきっと身についたものとして今後の生き方を助けてくれるだろうと、同世代の子を持つ身として、彼らの母親のような気分になって、会場を後にした、今年も元気をもらい、前向きな気持ちになれたことに感謝している。